

私が初めて彼女に逢ったのは、そんな雨の日でした。肩をすぼめて走っていた私に、何も言わずにそつと傘をさしかけてくれた。

生まれてこのかた、一度も会ったことのないような、それはすごい美人だった。そのときに、私の方から何か話しかけたのか、彼女が始めに言葉をかけたのか、よく思い出せないので。気がつく、もうずっと仲の良かった友達のように、彼女は私と語らっていました。

私の受け答えときたら、すつかりのぼせてしまい、まるで会話は上の空だったのですが、不思議と話が弾んで、気が付くと、次に会う約束までしていました。

ところが、良いことばかりは続かないもので。三回目のデートの時、不意にオートバイが突っ込んできて、よけそくなった私は頭を強く打ち、病院に担ぎ込まれてしまいました。

二日ほど、ひどい熱にうなされた後、どうにか元気にはなったのですが、なぜか理由も聞かされずに、私は窓も何もない白い壁に囲まれ、ベッドとトイレと、食事の差し込まれる小さな引き戸の付いたドアのある、おおよそ居心地が良いとは言えない部屋に閉じ込められたまま、一週間もたつと言うのに、まだ外に出してもらえません。

彼女は、と言うと、事故の後ずっと私を看病してくれまして、私がこの部屋に閉じ込められてからも、毎日見舞いに来てくれています。

その彼女が、昨日見舞いに来て、妙な事を言い出したのです。彼女が好きになった男性は、二人の仲がうまく行き始めた頃になると、必ず何らかの不具合が発生して、彼女から離れて行ってしまうと言うのです。

彼女は、クレオパトラ・ジュリエット、愛し合いながらも引き裂かれてしまった全ての女性、生まれ変わり、死に変わりして永遠の恋人を探している。と言うのです。

最初、私は、彼女が冗談を言っているんだと思いましたが、彼女があまりに真剣に言いつるので、つい調子を合わせて、ここから逃げ出すことを承知してしまいました。

誰にも邪魔されずに、二人だけで暮らせる世界に行こうと言うのです。

『ああ、この前の事故のけが人ですか。可愛そうに、あの男は少し精神に異常をきたしてしまつたようですね。』

『何でも、誰もいないところに向かって話しかけたりするそうで。』

『女？』

『ああ、あの事故の時一緒に居た。』

『そう、いい女でしたよ、私もつい見とれてしまった程で、』

『その女は、どうしたかって？』

『たしか、野次馬が集まりだした頃にはどこかへ行っちゃまってましたよ。

関り合いになるのが嫌だったんでしょね。もしかしたら女優か何かで、

お忍びのデートでもしていたんじゃないかな？』

『とにかくいい女でしたから』

『オートバイにはねられて救急車で運び込まれた患者さんですか？

はい、よく覚えていますよ。』

『え？ お見舞い？』

『お見舞いになど誰も来ていませんよ。』

『私は、最初からあの患者さんの担当でしたから、間違いありません。救

急車で担ぎこまれたときも、付き添いはいらっしやいませんでしたし、お

見舞いの方々は、皆さん私達の所に来て記録に名前を書いてから病室へ入

られるのですから、もしあの方にお見舞いの方が見えたのなら、気が付か

ないはずはありません。』

『何でも、信州の田舎から出てきているそうで、こちらには身寄りがお一

人もいらっしやらないとか。私の知る限り、精神科が有る病院に移される

まで、一人の見舞い客も見えませんでしたよ。』

『こちらに仲の良いお友達の一人もいらっしやらなかったんでしょかね、

淋しい人だったんですね。』

『へえ、あの方病院を逃げ出したんですか。』

『あちらの担当の介護士が鍵でもかけ忘れたんでしょか？』

『幻覚を見るような重症患者は、相当厳しく監視されているはずなんです

けどねえ』